大分合同新聞 2026年5月27日(水) 11面

チュニジアのモザイクアート
大分青年会議所に寄贈

【大分】昨年の大阪・関西万博で展示されたチュニジアのモザイクアートが26日、大分市の大分青年会議所（甲斐大啓理事長）に寄贈された。作品は同会議所の「おおいた未来博2026」の一環として、同市寿町の県立美術館（OPAM）に31日まで展示。万博に出展した大分県ブースも再現し、併せて公開する。入場無料。モザイクアートは展示後、別府市の立命館アジア太平洋大（APU）に贈る。

寄贈されたモザイクアートの前でテープカットをする関係者＝26日、大分市寿町の県立美術館

31日までOPAMで公開
大阪・関西万博で展示

日本青年会議所九州地区大分ブロック協議会と大分青年会議所が主催する第59回大分ブロック大会（30、31日・大分市）の開催記念事業の一環として、同会議所が万博のレガシー（遺産）を大分で発信することを企画。チュニジアは万博後の恒久的な保存先を探しており、同国で事業展開する大阪の青年会議所会員を通じて、大分青年会議所が受け入れを打診、実現した。

作品名は「エル・シャラフのオリーブ」（高さ4・5㍍、幅7・1㍍）。現存する樹齢約2500年のオリーブの木を、地中海沿岸に位置するチュニジアの歴史や文化の象徴として、石を敷き詰めて描いた。

チュニジアは1956年の独立後、6月で日本との外交関係樹立70年の節目となる。2002年のサッカーW杯日韓大会では、同国チームが佐伯市でキャンプを張った。一村一品にも長年取り組んでおり、昨年の万博ではチュニジア館で一村一品デーを開いた。

同美術館であった寄贈式で、甲斐理事長が「世界を地域につなぎ、展示後は世界の学生が集う場に価値ある作品を届けたい」とあいさつ。アハメッド・シャッフラ駐日特命全権大使は「文化交流を通じて協力を深めたい。作品がこれから先も、大分の人の記憶に残ってほしい」と述べ、関係者がテープカットした。

（宗岡博之）

あいさつするアハメッド・シャッフラ駐日特命全権大使

©大分合同新聞社　教育目的以外の無断転載・複製および頒布は禁止します。

大分合同新聞
ワークシート

年　　組　　氏名

〔問①〕今回、大分青年会議所に寄贈されたモザイクアートについて、次の（　）にあてはまる適切な言葉や数字を記事中から探して書いてください。

このモザイクアートは、(　　)というタイトルの作品で、（　　）沿岸に位置するチュニジアから寄贈された。樹齢約（　　）年の現存する（　　）を（　　）を敷き詰めて描いた作品となっており、昨年の(　　)で展示され、チュニジアは閉幕後の(　　)的な保存先を探していた。

〔問②〕大分とチュニジアにはこれまでどんな接点があったでしょうか。記事を読んで書いてください。

〔問③〕記事の中で、チュニジアのアハメッド・シャッフラ駐日特命全権大使は「文化交流を通じて協力を深めたい」と話しています。今回の芸術作品の寄贈のような国境を越えた文化交流が地域にもたらす影響は何でしょうか。あなたの考えを書いてください。

©大分合同新聞社　教育目的以外の無断転載・複製および頒布は禁止します。